

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町 10 番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

『総合社会福祉研究 第57号』

◆特集／介護保険 25 年がもたらした福祉労働者の非正規化を考える

【座談会】非正規労働者という切り口から福祉現場のいまを語る

……………磯田 宗一／矢田部 夏生 / 鴻上 圭太 / 濱畑 芳和
社会福祉基礎構造改革がもたらした諸問題と課題

——介護保険の給付抑制政策と非正規労働者の増加……………伊藤 周平

◆海外情報◆

イタリアの若者の社会的包摂をめざす2つの取り組み

——「若者保証」と「青少年センター」……………土岐 智賀子

韓国の居住問題と賃借世帯に対する支援の現状

——居住環境と住宅賃貸借契約制度利用の変化を中心に……………朴 仁淑

※無料でダウンロード可能です！「福祉のひろばHP」よりアクセスしてください。

編集・発行／総合社会福祉研究所

〒 543-0055 大阪市天王寺区悲田院町 8-12 国労南近畿会館 3 階

TEL : 06-6779-4894 Mail : mail@sosyaken.jp



世界の市民が手をつないで、 なくそう核兵器！

ニューヨークから世界に響いた核兵器廃絶の声



4月27日からニューヨークの国際連合（国連）本部で開催された、第11回核兵器不拡散条約（NPT）再検討会議にむけて、原水爆禁止日本協議会（日本原水協）の代表団95名が現地におもむき赴きました。私もその一員にくわり、現地8日間の行動に参加しました。

再検討会議の傍聴には3日間にわたって参加しました。初日の傍聴席は満席。英語から日本語に同時通訳をしていただきながらの傍聴なので、聞き取るだけでひと苦労です。それでも、モニターに映る発言者の表情や出席者の動き、会場内の拍手の多少などを直接見聞きでき、国際会議といっても遠い別世界の話ではなく、すべて同じ人間の営みであることを再認識しました。



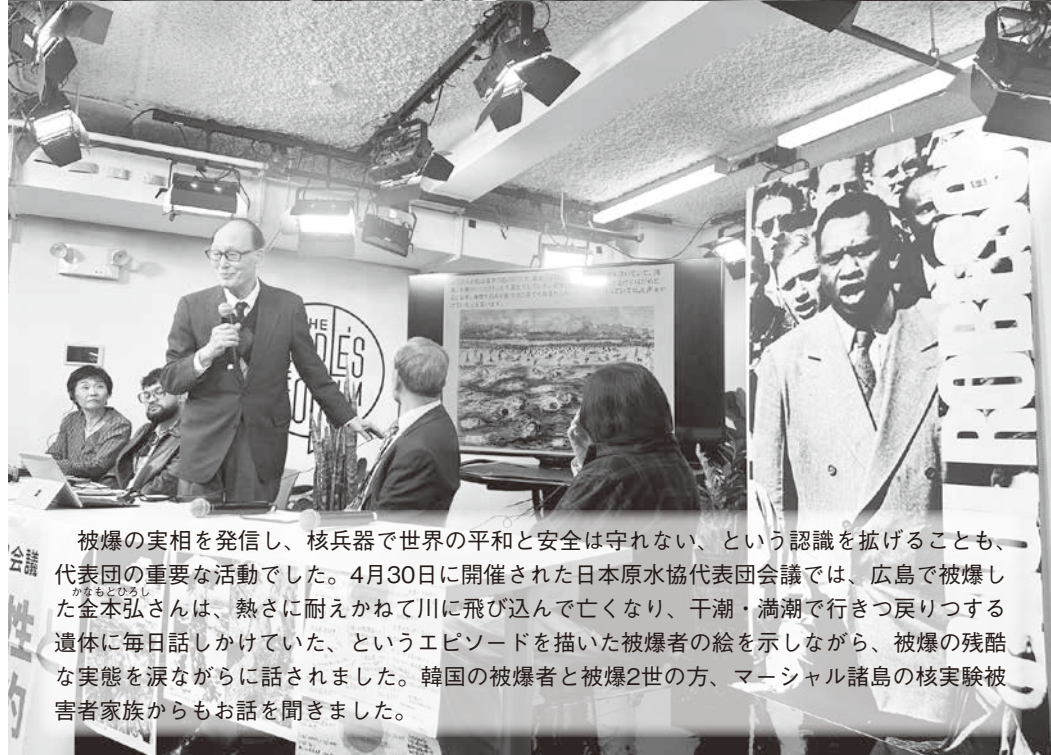
再検討会議開催の前日である4月26日には、ニューヨーク国際共同行動がとりくまれました。ニューヨーク公共図書館前での出発集会のあと、国連本部の近くまで約1.5kmを、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の横断幕を先頭に、およそ300人のパレードが歩き、沿道の方々にアピールしました。

河口近くの私の実家の前の川には、被爆して川に入った遺体は何体も浮いていて、満潮、干潮のたびに行ったり来たりしていた。近所のおばさんは、「引き上げてはためだよ。必ず、身寄りの人が見つけに来てくれるからね。もう少し、待っていてね」と声をかけていたといいます。



すべての川は怪我人や死体でいっぱいでした。まさに地獄絵そのものでした。

すべの川は怪我人や死体でいっぱいでした。



被爆の実相を発信し、核兵器で世界の平和と安全は守れない、という認識を広げることも、代表団の重要な活動でした。4月30日に開催された日本原水協代表団会議では、広島で被爆した金本弘さんは、熱さに耐えかねて川に飛び込んで亡くなり、干潮・満潮で行きつ戻りつする遺体に毎日話しかけていた、というエピソードを描いた被爆者の絵を示しながら、被爆の残酷な実態を涙ながらに話されました。韓国の被爆者と被爆2世の方、マーシャル諸島の核実験被害者家族からお話を聞きました。



今回の行動では、アメリカで平和運動にとりくむ方々と交流できたことも印象的でした。

4月30日の女性交流会でお話してくれたニノ・ブルジャナゼさんは、ニューヨークで平和運動にとりくむピース・アクションのメンバーで、昨年来日し、原水爆禁止2025年世界大会に参加されました。

私たち市民が国境を越え、市民運動レベルでの交流と連帯の力で核兵器をなくす方向へ各国政府を押し上げていく、目線はグローバルに保ちつつ、動きはローカルから作っていくことが可能であるし、いっそう重要になると確信した行動になりました。

(写真・日本原水協代表团、文・中島素美)

【ひろばトーク】

戦争は、最大の人権侵害～沖縄からのメッセージ～

ウィンフィールド ひろみ 6

福祉のひろば

2026年8月号

●特集● いまこそ、平和と憲法を考える

いまあらためて考える、日本国憲法の意義	國本 依伸	10
あなたからはじまる平和運動	岩本 悟	14
平和を守り、引き継いでいく一人として	柏木美沙希	18
学び、対話を重ねながら、平和について考えつづけたい	竹田 沙世	20
知りつづけて、伝えつづけることをこれからも	朴 仁淑	22
——立命館中学校・高等学校の平和教育と美術部の平和実践		
立命館憲章「改正」反対運動にとりくんで	松尾 菜生	26
トランプ政権によって、世界はどう変えられつつあるか		30

●サブ特集●

NPT再検討会議ニューヨーク行動レポート!(前編)	中島 素美	34
---------------------------	-------	----

●トピックス●

「逆流の時代」にどう立ち向かうのか		42
舞鶴から平和と福祉を考える	黄 驥	46

●連載●

海の中から地球が見える 第4回 色を失った海	武本 匡弘	50
『福祉のひろば』とわたし (5)		
民主化の波をからだで感じながら	眞木 和義	52
政治を見る目		
第5回 衆議院比例削減は身を切る改革?	長澤 高明	54
世界と交流する平和の船に乗ってみた! (南半球編)		
第5回 砂漠に生まれた自治の街 ビジャ・エルサルバドル		
	根津眞澄+オット	56

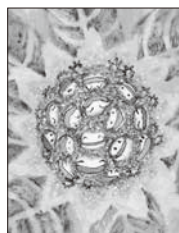
世界のソーシャルアクション! 番外編

出稼ぎの陰で取り残される人びと	陳 意	60
J O B & A C T I O N 全国福祉保育労働組合 (65)		
中央行動で人権保障の学習と政府交渉を実施		62
私の履歴書 社会福祉経営全国会議 (65)		
親の会に学び、地域と歩んだ46年	青木 一博	64
阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎 (85)	水野阿修羅	66
育つ風景 保育園のICT化の現在	清水 玲子	68
映画案内 『シェーン』	吉村 英夫	70
現代の貧困を訪ねて	生田 武志	72
大原孫三郎・總一郎、山川均・菊栄、石井十次 (美術館・軍隊・空襲)		
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート		
良いロンか?! 悪いロンか?!	ラッキー植松	74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜	76
モトコの66歳えぶりでい	川口モトコ	77

みんなのポスト 48/福祉の動き 78/今月の本棚 81

●グラビア● 世界の市民が手をつないで、なくそう核兵器!
ニューヨークから世界に響いた核兵器廃絶の声

●表紙の絵●
神門やす子



戦争は、最大の人権侵害 ～沖縄からのメッセージ～

社会福祉法人沖縄エンゼル福祉会 グッピー保育園園長

ウィンフィールド ひろみ

私は一九九二年、ハワイ出身の日系白人のミックスである夫と出会い、結婚しました。その後、当時一歳だった娘を連れてハワイへ移住し、二年間暮らしました。しかし、アメリカ社会の歪みや教育の崩壊、十分な生活保障のないきびしい現実に直面し、日本へ帰国することを決意しました。帰国後、私はあらためて、自分が暮らす沖縄の置かれている現状について考えるようになりました。日本国土のわずか〇・六％にすぎない沖縄県に、全国の米軍専用施設・区域面積の約七〇％が集中しています。米軍基地によって日本の安全が守られていると考える人もいますが、有事の際に真っ先に攻撃されるのは沖縄だということは、現在の中東紛争をみても明らかです。かつての私は、こうした問題に無関心でした。しかし、子どもを授かったことで、子どもたちには平和な未来を託したいという思いが強くなり、これまで自分が疑いもしなかった「正義」を見つめ直すきっかけとなりました。

沖縄には、戦争の傷痕が今も色濃く残されています。本土復帰の一九七二年から現在までに、不発弾処理は四万件を超えています。平均すると、毎日二件以上の不発弾が処理されているのです。さらに、現在も約一九〇〇トンもの不発弾が地中に残され、その処理には一〇〇年近くかかるともいわれています。一度戦争が起これば、その影響は何世代にもわたって続くのです。だからこそ、戦争は絶対にしてはいけません。

しかし、沖縄を取り巻く状況はますますきびしくなっています。普天間基地の移設問題は、一九九六年の返還合意から長きにわたり県民を翻弄しつづけてきました。沖縄県は何度も反対の声を上げ、二〇一九年の県民投票では投票者の七割以上が辺野古への新基地建設に反対しましたが、その民意は顧みられることなく、裁判を起こしても工事は



ウィンフィールド ひろみ

1964年沖縄県生まれ。14～24歳アメリカ留学。帰国後、英会話講師などを経て、沖縄県国際交流財団に就職。1997年にグッピー保育園に就職し、2003年より園長に就任。2006年より全国保育問題研究会にて「乳幼児期における平和教育」運営委員を務める。沖縄県私立保育園連盟副会長。

進められ、今も止まることはありません。

この流れは、主に二〇一〇年一二月に策定された防衛計画の大綱を皮切りに本格化しています。二〇一六年の与那国島への陸上自衛隊駐屯地開設に続き、宮古島や石垣島へと次々に自衛隊基地やミサイル部隊の配備が進められました。日本政府によって最前線に位置づけられた沖縄は、いまやミサイル配備の拠点としての役割を担わされています。さらに、台湾有事を想定した住民の避難計画まで検討されており、報道では、酪農家が「どの牛を残すか」を選択せざるをえない過酷な現状が伝えられています。有事が決して遠い世界の話ではなく、住民の暮らしや生業に直接関わる問題となっていることを示しています。

私は沖縄を愛する一人の人間として、全国へ、そして世界へ伝えたいことがあります。「戦争は、最大の人権侵害」です。戦争は多くの命を奪うだけでなく、不発弾を残し、PFOSやPFASなどによる土壌や水質汚染を引き起こし、地域社会に長期にわたる深刻な影響を及ぼします。「世界が咳をすると、沖縄は風邪をひき重症化する」といわれるように、沖縄は国際情勢の荒波を真っ先に受ける地域です。だからこそ沖縄から、「戦争を選ばない」「平和しか選択肢はない」というメッセージを発信しつづける必要があります。経済学者・評論家の暉峻淑子さん（埼玉大学名誉教授）の、「戦争の反対は対話です」の言葉に深く共感しています。国民一人ひとりが「対話する力」を身につけることが、ひいては、「平和を構築する」ことにつながると信じてやみません。子どもたちに、「ケンカは仲直りの練習だよ」と伝えながら、「日常の平和」を心から実感し、お互いに仲良く手を取り合っている社会を創造してほしいと切望します。

地域を、国を超えてつなげる市民の力

毎年、さまざまな角度から「平和と福祉」について考えたいと企画している八月号。世界では、ロシアのウクライナ侵攻から四年以上、アメリカとイスラエルによるイラン攻撃から一年以上が経ちますが、いまだ終結することなく、イスラエルによるパレスチナ人に対するジェノサイド（大量虐殺）はつづき、子どもをふくむ市民の命がうばわれつづけています。日本も決して無関係ではなく、ホルムズ海峡の封鎖による物価高は国民の生活を直撃し、トランプ米大統領はより具体的・直接的に、日本などにホルムズ海峡への艦船派遣を要請するなど、「戦争」への加担を求めています。

三月におこなわれた日米首脳会談では、そうしたトランプ大統領の要請に対し、高市首相が、日本には憲法九条の制約があることがありと伝え、トランプ大統領の要求を「かわした」などと報道されました。あらためて憲法九条の意義が注目されましたが、いっぽうで高市首相は憲法改正へ高い意欲を示しており、現在、衆議院では自民党が単独で改憲を発議できる三分の二以上の議席を得ていることから、改憲がより現実的な問題として迫っています。

そうした世界の状況、日本の状況を前に、今号の特集では、あらためて憲法とはなにか、憲法の役割を

ふり返るとともに、私たちの日々の生活に引き寄せて、平和とはなにか、平和の実現のためにできることはなにか、考えたいと思います。また、日本が追隨しているアメリカ、トランプ政権の分析について、国際政治学者である三牧聖子さんのお話も紹介します。

サブ特集では、総合社会福祉研究所の中島素美事務局長が、原水爆禁止日本協議会の代表団の一人として参加した、「NPPT（核兵器の不拡散に関する条約）再検討会議」の傍聴をふくむニューヨークでの活動について、今号と次号の二回に分け、現地行動レポートを紹介します。

福祉の仕事は、目の前にいる子ども、障害のある人、高齢者、すべての人のいのちと人権を守る仕事です。もちろん、賃金の低さやそれゆえの担い手不足が深刻ななかで、「人権を守る福祉実践」はかんたんなことではなく、「やりたいけどできない」葛藤のなかで試行錯誤しているわけですが、「すべての人の人権が守られる」ことは「あたりまえ」であり、それを実現したいと奮闘しています。

戦争も虐殺も差別も、なかなか世界からなくならないことにめげそうになりますが、平和や人権保障をあたりまえに大切にしたいと考えている人は、日本にも、世界にもたくさんいることを、サブ特集のNPPTニューヨークレポートからあらためて感じます。特集のなかで日本平和委員会の岩本悟さんは、「私たちはしばしば自分たちを『少数派』と自認しがちですが、実際はそうではないかもしれないかもしれません」と書いてくださっています。あたりまえのことをあたりまえに大切にできる世の中

をつくれる市民の力を、みなさんと確認できればうれしいです。（編集主任 申 佳弥）

